



ドクター・ハザマの

バイタルサイン塾 20

「CDTM」こそ医師と薬剤師の新たな連携

ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座
医師・医学博士 狭間 研至

バイタルサインをとりまく現状を一変!? 「共同薬物治療管理」の衝撃

この数年、薬剤師にとってのバイタルサインは、その法的意味や学び方などについて議論されることが多かったと思います。私自身も、いろいろな場所で講演や執筆をさせていただくときには、このあたりを重点的にご説明していました。

しかし、今や時代は大きく変わったと感じます。何よりも、6年制薬学教育の中で、当たり前のように薬学生はバイタルサインについて理論と手技を学んでいます。法的意義については、ほとんど意識することすらないようです。

その一方で、薬剤師によるバイタルサインの採集や利活用に、比較的距離を置く考え方もあります。私は、医療に携わる人が、目の前の患者さんの状態を自分の手で理解するツールを持つことは、基本的に意味があると思っていますが、今までの歴史的な背景や、現在の薬剤師を取り巻く環境を考えると、ある意味当然かと思っています。

昨今のチーム医療推進に向けた行政の動きや、厚生労働省医政局長通知などを見ても、このあたりの議論は、今後深まっていくことと思いますが、現状のまま平行線をたどる可能性もあるのではないかと思います。

ただ、2年ほど前から取りざたされている「共同薬

物治療管理」という概念は、このような状況を一変させるほどの衝撃があるのではないかと考えています。

医師に「新しい治療戦略」をもたらす 薬剤師との「共同薬物治療管理」

「共同薬物治療管理」は、1970年代に米国で生まれた概念で、Collaborative Drug Therapy Management (CDTM) の訳語です。患者の薬物治療管理について医師と薬剤師があらかじめ作成・合意されたプロトコルに基づいて共同して取り組むもので、この連載でも、これまで折に触れて少しずつお話ししてきました。この概念については、日本薬剤師会からも報告書や書籍が出ており、今後も広がっていくと思われれます。

ただ、日本に米国の仕組みをそのまま持ち込むことは容易ではありません。しかし、日本の医療が直面する問題の解決策に思いを巡らせるときには、この概念は大きな意味を持つでしょう。そのためにも、CDTMという米国の概念をいち早く学び、日本にいかに対応するかというのではなく、「共同薬物治療管理」という日本語をもとに考え直したほうがよいのではないかと思います。

CDTMの概念を知ったとき、病院の方だと「すでに、あうんの呼吸でやっています」、地域医療連携に携わる方だと「つまり、地域連携パスですね」とおっしゃるケースがあります。私は、在宅訪問診療に薬剤師と同行していますが、CDTMの概念を知り、自分の業務を見直していくなかで大きな気づきを得ました。

「共同薬物治療管理」は、医師と薬剤師が新たな連携を結ぶことです。すなわち、医師が処方し薬剤師が調剤するという硬直化した関係からの変化だと思えます。そして、このことは医師にとって「新しい治療戦略」になりうるはずなのです。

